平成八年度（第二十三回）武蔵御嶽神社新年奉納俳句入選作品集

奉納式　平成八年二月十一日
選者　来住野臥丘

特選

一席　元朝のさやかに車内アナウンス　入間　荒井恵邦
二席　千早振る篝火爆ぜて淑気満つ　町田　中川龍造
三席　破魔矢の鈴百余の磴を弾み下り　青梅　井上登志子
四席　去年今年尽きぬ澗響詣道　入間　高山振二
五席　うしろ手をして松過ぎの女坂　青梅　木口ヒロ子

秀逸（到着順）

狆を抱き孫歩かせて初詣　青梅　原島康典
道よりも低き講宿白障子　入間　中村鳴川
悟堂の碑探しあぐねし尉鶲　青梅　佐久間玄寿
バタバタ車山の今年が動き初む　福生　井上貞子
初詣一灯ともる谷の底　飯能　森泉双輪
それぞれのリフトの背にある初日かな　入間　巻田初子
霧の句碑巡りて冬の土柔き　青梅　白井芳子
枝打ちの音遠くして笹鳴けり　青梅　市川賢
越冬の蜂が棲みつく注連太し　入間　上原春灯
三十三才行き止まりなる御師の家　あきる野　大野絢子

選者吟

補聴器をはずし聞く分く除夜の鐘　臥丘
初詣大きく拍てり農夫の手　〃

平成八年奉納俳句選評

奉納俳句がすむとやっと正月が来たような気持ちになる。一月十五日に締切、二月十一日迄に選句奉納となると、主催者側の事務も大変であると思うが千句前後の作品の選も、平常の選句と違って緊張感に一段と強いものを感じる。

今年の作品は特別例年と変ったということもなかったが、その一つ二つあげると古語を使った作品の多かったこと、不断あまりつかわれない漢字の多かったことであろう。二十三回目ということで投稿者が年をそれだけとったとも考えられぬことはないが二十三年で古語となることも無いし、毎年投稿者が同じということもないのであるから外に何か理由があるか、偶然のことであったかも知れない。唯一つ考えられるのは毎年同じ時に同じ場所で、その上初詣でという共通した気持から作るので、せめて、表現の段階で従前の作品と違った字句なり、表現なりを考えたのかもしれない。

特選一席の作品は誰にも同じように感じられるし、欠点のない素直な作品であり、作者の人柄の感じられる作で、車内は勿論ケーブルカー（登山電車）であろう。

二席の千早振るの作品は枕詞〈千早振る〉から始まっているが神に関係ある物に使う枕詞としてではなく（勿論篝火とか淑気とか神に関係なくはないが）千早振るの言葉のもつ意味そのままに、篝火の勢の強いさまの形容として生かしたかったものと思う。

三席の破魔矢は現代の神社で頂く子供の健康息災を祈る家に飾るものであり、磴もまた最近よく使われてきたが石を敷きつめた登り坂の外に石段を含めての磴である。写生そのままの作品であるが〈弾み下り〉で生きた。

四席の尽きぬ〈澗響〉もあまり目に触れない字であるが谷川の水の響の意であり水音でも谷音でもよいわけであるが、作者は上五句の〈去年今年〉の季節の持つ輻湊した意から、水音・谷音・では満足出来ず使ったものであろう。

五席は松の内のめでたいが女性にとっては中々忙しい時を過ぎ、遅れ馳せの御嶽神社への初詣を詠んだものであろう。熟年中年のはっきりした年齢の区別は知らないが〈うしろ手をして〉の言葉にもろもろの思いがある。

秀逸・佳作は字句にのみ簡単に触れておく。

「狆」は犬の品種の一つ。字で見る通り、中国より輸入した小型愛玩の犬。

「慰鶲」歳時記の多くは秋の部にあるが、黄鶲・瑠璃鶲などと同じように冬見ることも多い。

○四月二十九日　午前九時
○大鳥居前広場

第五十回記念
奉納剣道大会
女子個人戦　男子団体戦

『草木みな よく言語ふ』

神社の杜（六）

ビジターセンター所長　片柳　茂生

天孫降臨がおこなわれる前の葦原中津国は、「磐根木株草葉もみなよく言語ふ」世界だったそうだ。草や木をはじめ、岩までもが、さわがしい声を発していたという。

それでは、参道の杉が、今、どの様な事を話しているか、ビジターセンターふうに検証してみよう。

「おいこら、ムササビ、痛てーぞ。もう少し優しくかじれよな。いくら俺の腹の中が居心地がいいからっていっても、そうガリガリかじられたんじゃたまんねーや。まあ、おめー等とは、百年からの付き合いだからな、少しぐらいしかたねーか。

なになに、これも何かの縁だから話しをしてくれって。まあいいだろう俺もちょうど話しがしたかったところよ。

此処のうまれかって？いや、実は養子なんだよ、ちょんまげを結ってる人間に連れてこられたんだ。どこで生まれたか忘れちまったけどよ、確か此処に来たときは四つか五つの時だったな。神様の側に植えられるてっんで、大勢の中から選ばれた、いわばエリートって奴よ。あれから三百年とちょっと経つけどいろんな事があったなー。

若い時に、素直じゃねー奴とか、病弱の奴は切られちまったし、台風にやられた奴も大勢いたな。俺みてーな丈夫な者だけ残ったって訳よ。

俺だって若いときはよ、背も高くてよ格好良かったんだぜ。ま、これも、昔大切に世話をしてもらったおかげだけどな。今の人間はダメだな、ろくな手入れもしねーから若い奴が大きくなれやしねー。

雷の奴が八つ当たりしやがってよ、俺に落ちた時はびっくりしたね。頭を割られちまってよ、そのおかげで上の方をちょん切られて、銅の帽子をかぶるはめになっちまった。あと、このごろの雨がいけねーな。酸性雨って言うのかい、あのせいで頭が枯れちまうんだよ。なんとかしてもらいてーよな、まったく。

おっといけねー、愚痴になっちまった。

おいおい、むささび、小便は外でやるもんだ。腹ん中でやられたら臭くてしょうがねーやな。」

ムササビ
リス科の哺乳類頭胴長四〇㎝、背は黒褐色、腹は白色、頬は白い。前後肢の間に飛膜が発達し、木から木へ滑空する。昼は樹木の空洞内に潜み、木の芽、果実などを食う。

二月三日の節分祭

節分は冬から春にうつりかわる立春の前日のことで、この日には古くから疫鬼を追い払う追儺（おにやらい）行事がおこなわれている。追儺行事は、文武天皇の慶雲三年（七〇六）に疫病が流行した際に、宮中で初めておこなわれたことが資料に記されており現在でも追儺行事、豆撒きなどがおこなわれている。御嶽神社の豆撒きは午前十一時、正午、午後一時と年男年女約六十名づつ三回に分けて、それぞれ裃姿になり、まず祭典に参列。その後回廊から一斉に「鬼は外、福は内」のかけ声で豆撒きが行われた。日曜日とあって多勢集った人々は、「こっちにもほうって～」と口々に叫びながら拾いあっていた。